

修士論文（要旨）
2009年1月

国際補助語としての英語に関する一考察
—普及と成立、多様化、そして日本英語を考える—

指導 森住 衛 教授

国際学研究科
言語教育専攻
207J4018
山下 美峰

目 次

序論

1 本論文の問題の所在と立脚点	1
2 本論文の目的	3
3 研究方法	3

第1章 英語の普及と国際補助語としての成立

第1節 英語の普及と国際補助語としての成立の背景	4
第2節 国際補助語としての英語の種類	6

第2章 英語の多様化の実際

第1節 イギリス英語・アメリカ英語・オーストラリア英語	9
第2節 シンガポール英語	14
第3節 中国英語	15

第3章 日本英語の方向性

第1節 指導要領に見る英語教育の変遷	18
第2節 諸英語の考え方の歴史	18

第4章 中学校英語教育での対応

第1節 教材作成	24
第2節 実践	28

結論

1 本研究のまとめ	31
2 研究の応用性	33
3 今後の課題	33

注釈	34
----------	----

参考文献	I
------------	---

謝辞

資料	-1-
----------	-----

要 旨

本研究は、国際補助語としての英語 (English as an International Auxiliary Language 以下 EIAL) に関するものである。テーマ設定の理由として、まず ALT の多様化による中学校の英語教育の現場での混乱があげられる。英語は英語の母語話者から指導してほしいと考えている生徒と保護者が少なくないが、今日、英語を公用語や第二言語で使用している非英語母語話者が ALT として世界中から来日している。日本人が規範としてきた米語とは異なる音声の、日本人の聞き慣れない英語が各中学校で出回るようになってきた。つまり、英語の音声の多様化が現実となっている。このことが原因で公立中学校に勤務する筆者の身近に大きく取り上げざるをえない英語をめぐる混乱が起きている。

次に、世界の英語の実情の明確化と早急な対応の必要があげられる。*World Englishes* という雑誌がイギリスで創刊されたのは、1981年のことである。つまり、そのころには、'English'を'Englishes'という複数形で呼び得るような環境がすでに整っていたということになるが、それから30年経っているのに現在の日本ではまだイギリス英語かアメリカ英語かといった単純な図式で英語をとらえがちである。

最後に、中学校の教科書等での未対応があげられる。文部科学省の検定済み中学校英語教科書を調査した。どの教科書にも世界の様々な地域の人物や生活が題材として取り上げられてはいるが、そこで使用されている多様化した英語に関する題材はほぼ皆無であった。英語の勢力の拡大と共に、世界に認知される英語の変種の数も増加している現状にあって、イギリス英語かアメリカ英語を目標にしている日本の英語教育は世界に立ち後れてはしまわないだろうか心配になる。

本論文の目的は次の4点とした。1)英語が普及し、EIALとして成立した理由を分析する。2)英語の多様化の現状を分析する。3)日本英語もEIALの1つととらえ、その方向性を考える。4)自主教材を作成し、公立中学校で実際に授業実践する。

研究方法は上記の目的を達成するため次の3点とした。1)論文全体の構成を、序論・本論・結論とする。序論では、本研究の問題の所在とテーマ設定の理由、目的と方法を概観する。本論は4章立てで、それぞれが研究の目的に対応するように書き進める。第1章では、英語の世界的普及と変容が起こった原因について言及し、第2章では、英語の多様化の実際を分析する。第3章では、これら英語の多様化に日本ではどのように対応してきたのか調査し、Englishesの1つである日本英語の方向性を考察する。第4章では、公立中学校の生徒にこれらの国際補助語としての英語の理念を伝えるための手立てについて考え、自主教材づくりとその実践についてふれる。結論では、本研究のまとめと考察を行い、本研究の応用性と今後の課題について述べる。

本論文の立脚点として、人間は多様な生き物であることから言語や文化も同様に多様であるにとらえる。中学生に、様々なEIALの知識を与えることにより、英語は英語国民の特権的独占的な言語ではなく、また、英語だけが外国語ではないことに気づかせる。さらに、自分たちが身につける英語は、日本語の影響を受けた「日本英語」であり、それに対する負い目を感じる必要がないことを知らせることができる。中学生の段階からEIALの理念を教えることで、他者理解、異文化間理解を深める能力を身につけ、社会平和に貢献できる日本人を育成する一助となることを願っている。

参考文献

- 石川林四郎(1937)『英語の理論と問題』 研究社.
- 小田実(1970)「<イングリッシュ>と<イングラント>」 梅棹忠夫・永井道雄 (編)『私の外国語』 中央公論社.
- 大谷泰照・林桂子・相川真佐夫・東眞須美・沖原勝昭・河合忠仁・竹内慶子・武久文代(2004)『世界の外国語教育政策・日本の外国語教育の再構築にむけて』 東信堂.
- (2007)『日本人にとって英語とは何かー異文化理解のあり方を問うー』 大修館書店.
- グラッドル,デイビッド(1999)『英語の未来』 山岸勝栄訳 研究社出版.
- スイッペル,パトリシア(2004)「オーストラリアと英語」 竹下裕子 (訳)『世界は英語をどう使っているか<日本人の英語>を考えるために World of English』 竹下裕子・石川卓(編著)新曜社.
- 末延岑生(2006)「小学校英語の必修化に思う」『JAF AE NEWSLETTER』 2006 No.20 日本「アジア英語」学会.
- 鈴木孝夫(1971)「English から Englic へ」『英語教育』 大修館書店 Vol.19, No.10.
- 竹下裕子・石川卓(2004)『世界は英語をどう使っているか<日本人の英語>を考えるために World of English』 新曜社.
- 田辺洋二 (2004 a)「教育の多様化と学校英語の未来像」 *Obirin Synergy* 2号 桜美林大学大学院国際学研究科.
- 寺島隆吉(2007)『英語教育原論』 明石書店.
- 日野信行(2003)「<国際英語>研究の体系化に向けて…日本の英語教育の視点から」 日本「アジア英語」学会紀要『アジア英語研究』 第5号.
- (2005)「国際英語」『英語教育の基礎知識』 小寺茂明・吉田晴世共著 大修館書店.
- 本名信行(2003a)『世界の英語を歩く』 集英社新書.
- (2006a)『英語はアジアを結ぶ』 玉川大学出版部.
- 町田健(2008)『言語世界地図』 新潮新書 新潮社.
- 村井雄(1990)『都市国家シンガポール』 三一書房.
- 森住衛(2006)「<外国語教育=英語教育>でよいのか」『英語教育』 大修館書店 Vol.55, No.3.
- (2007a)「中・高の教科書における<国際英語>」『英語教育』 大修館書店 Vol.56, No.5.
- (2008a)「日本人が使う EIALー立脚点・内実の方向性・教科書の扱い」 日本「アジア英語」学会紀要『アジア英語研究』 第10号.
- (2008b)「EIAL の一例としての<日本英語>ーその目指すべき方向を求めてー」
『日英の言語・文化・教育ー多様な視座を求めてー』 日英言語文化研究会編、三修社.
- (2008c)「中・高英語教育の来し方行く末ー戦後 60 年の教育課程と学習指導要領の総括の試みー」
Obirin Synergy 第6号 桜美林大学大学院国際学研究科.
- 山田雄一郎(2003a)『言語政策としての英語教育』 溪水社.
- 渡辺武達(1983)『Japalish グローバル化と英語革命ージャパリッシュのすすめー』 論創社.